

第196回定期演奏会 ～春・声～

2023年5月13日(土) 13:45開場 14:30開演

[14:10～ 指揮者プレトークあり]

三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮(常任指揮者)

ヴァイオリン/島田真千子(ソロコンサートマスター)*

チェロ/石川祐丈*

ディーリアス: 春の牧歌

ブラームス: ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲イ短調Op.102*

ブラームス: 交響曲第1番ハ短調Op.68



©Hikaru Hoshi



©hutarito2022



◆春からの新シーズンは、ブラームスと共に!

ショスタコーヴィチとマーラー……生と死のあいだに広がる深い淵をのぞき込むような傑作ふたつをお聴きいただいている本日に続きまして、次回・第196回定期(5月13日)は新シーズンのスタートです。

2023年は、しらかわホールで定期演奏会が行われる最後の年でもありますから、セントラル愛知交響楽団の音楽を磨いてきた、この響き美しいホールとのお別れを惜しみつつ、オーケストラにとって大切な作曲家を、1年かけてじっくり取りあげてゆきます。これまでも折に触れて、その傑作たちを取りあげてきたドイツの巨匠、ヨハネス・ブラームス(1833～1897)です。

いずれも異なる豊かな魅力に溢れた4つの交響曲、スケールも壮大でソリストの芸術性を存分に華ひらかせる協奏曲の数々など……ブラームスの作品は、いくたび演奏してもオーケストラに新たな喜びをもたらす傑作ぞろいです。隅まで練り込まれたその作品たちは、偉大な先人たちの生んだ古典への敬愛を深くたたえながら、詩情の薫るメロディ、深く巧みなハーモニーと緻密な構築美など、隙なく(しかし、すっと心に溶けて長い余韻を残す)素晴らしいものばかり。

心の陰翳にふかく染みて響くような哀愁、ふと温かく響く人間味やユーモア、力強く解き放たれる喜びの凱歌……。知性と感情の豊かな昇華も溢く輝くブラームスの名作たちに、そのサウンドに最も適した大きさのオーケストラでもあるセントラル愛知交響楽団が、1年間を通してあらためて深く、じっくりと向き合っただけで、この旅をぜひ、ご一緒に。

◆なぜか書かれなかった〈チェロ協奏曲〉のかわりに

次回定期は、ブラームスと過ごすシーズンのはじまりの回。楽団と実り多き路をたしかに歩んできた我が常任指揮者、マエストロ角田鋼亮が、ブラームス渾身の力作〈交響曲第1番〉で新たな扉をひらきます。そして、名古屋出身の優れたソリストたちと共に、ブラームス晩年の人気作・〈ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲〉(ソリストが二人、という豪華なコンチェルト!)を堂々と。

次回プログラムのご紹介は、まずこの珍しい〈二重協奏曲〉からお話しましょう。

——中低音の深みある魅力を歌い響かせる楽器・チェロは、ブラームスの作品でもしばしば大切な役割を果たしますが、残念なことにはブラームスは〈チェロ協奏曲〉をひとつも書きませんでした。

ヴァイオリンのためには、ブラームス45歳の1878年に作曲された〈ヴァイオリン協奏曲 二長調〉Op.77という見事な大作があるのに(こちらはブラームス・シリーズの最後を飾る2024年2月の第202回定期で、名手・神尾真由子を迎えてお聴きいただけます)、もし〈チェロ協奏曲〉が作曲されていたら……と思うのですが、無いものは仕方ありません。

とはいえ(だからこそ!)、聴き逃すわけにはいかない名曲が残されています。次回定期でお聴きいただく〈ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調〉Op.102(54歳/1887年に作曲)という、ソリストが二人、オーケストラと力強くも瑞々しく響きあう、とても聴きごたえのある作品です。

◆珍しい「ソリストふたり」の協奏曲、その聴きどころ

それにしても、ソリストが二人、というのも珍しい作品ですが、その由来や特徴など詳しくは、当日の楽曲解説にお譲りするとして……ブラームスの他の協奏曲にくらべて、力強くも明快な作品です。もちろん、他の曲が分かりにくいというわけではありませんが、曲の構成も割に複雑でなく、ソリストたちとオーケストラとが(楽器の音色を見事に活かして歌いぬく、素敵な緩徐楽章をはさみながら)昂揚感と共に走りぬけてゆくので、「初めてブラームスの協奏曲を聴く」というかたにも、入りやすく愉しめる作品だと思えますし、味わうほどに豊かな奥の深さもしっかりとあります。

なにより、ソリストふたりの丁々発止、ヴァイオリンとチェロとのスリリングな掛け合いはもちろん、同じ弦楽器でも異なる音色・音域の楽器同士だからこそ、ふたりの音楽が重なるときに生まれる絶妙な彩り、調和の豊かさ、艶と陰翳……しかもその二人が、さらにオーケストラとも壮大な対話を繰り広げるといふ喜び!これは、ぜひ生演奏で体感していただきたいものです。

次回定期でこのソロを弾く、名古屋出身のお二人——まずヴァイオリン独奏は島田真千子。セントラル愛知交響楽団のソロコンサートマスターとして、楽団の音楽づくりを軸として支える名奏者です。ドイツで研鑽を積んだ島田さんは、独奏・室内楽・オーケ

ストラとさまざまなブーム演奏経験も豊富で、まさに〈二重協奏曲〉のソリストにふさわしいかた。楽団の仲間たちとの音楽的対話にも注目です。

そして、チェロ独奏は石川祐支。東京交響楽団首席チェロ奏者を経て、2005年からは札幌交響楽団の首席チェロ奏者として活躍する石川さんもまた、ブームス〈チェロ・ソナタ〉全2曲の優れたCD録音（2016年）が高く評価されるなど、ブームスの貌を熟知するかたです。

ブームス・シリーズの旅立ちにふさわしいソリスト二人と共に、セントラル愛知交響楽団がひらく協奏曲の魅力——忘れがたい時間を期待いたしましょう！

◆ベートーヴェンを超えて——〈交響曲第1番〉の充実！

次回定期の後半では、ブームスが43歳の1876年に完成させた力作〈交響曲第1番 ハ短調〉Op.68をお聴きいただきます。

あるとき、この曲を聴いた人が作曲家に向かって「第4楽章のテーマがベートーヴェンの《歓喜の歌》によく似ているのは不思議だ」と述べたとか（失礼な話ですが！）。ブームスはそれにこたえて「ロバの耳には同じに聞こえる、ということのほうがよっぽど不思議だ」と言い放った……という逸話があります。たしかに、言われてみればそんな気も……というメロディではあるのですが、もちろんベートーヴェンを真似したというわけではなく、ありあまる敬愛ゆえのオマージュでしょう。

ともあれ、そんな逸話があるくらい、ブームスの〈交響曲第1番〉は、初演の頃からベートーヴェンとの関連が強く語られてきた作品です。

なにしろ、ブームスの時代の作曲家にとって、大先輩・ベートーヴェンの遺した9つの交響曲は、偉大すぎるあまりに、強烈なプレッシャーでもありました。ブームスも、青年時代の29歳頃から〈交響曲第1番〉の作曲に取り組むのですが、ようやく仕上げたのは43歳と、とんでもない長期間にわたって産みの苦しみを味わうことになったのです。

その反動か、次の〈交響曲第2番〉（6月の第197回定期でお聴きいただきます）は、あっという間に書き上げた快活で爽やかな作品になっているのですが……こちら、次回お聴きいただく〈交響曲第1番〉のほうは、どっしり構えた重くも力強い傑作です。

◆強烈な起伏、壮大なフィナーレへ……ぜひ身体で感じたいシンフォニー

〈交響曲第1番〉はしばしば、〈苦悩から歓喜へ〉という隠されたテーマ——これも、ベートーヴェンが得意としたものでしたが——を反映しているように聴かれます。

実際、特に最後の第4楽章はまさに、暗鬱な序奏からはじまって、遙かな山々から響いてくるような、のびやかなホルン独奏……そして、例の《歓喜の歌》にも似たテーマが登場してくると、オーケストラの疾走が、凱歌のような壮大なエンディングまでパワフルに駆け抜けていきます。

聴き手を巻き込むこの圧倒的な終楽章はもちろん、作品全体にうねる巨大な起伏もまた、強烈な印象を残すことでしょう。第1楽章でうねり轟く、〈対比〉と〈融合〉の烈しいせめぎあい、はたまた、決して融け合うことのない強烈な何か……。あるいは、一転して柔らかに美しい緩徐楽章では、室内楽的なサウンドも魅力的で心を和ませてくれます。

……といった具合に、すべての楽章に見事な創意もこめられて、幾たび聴いても新しい発見のある〈交響曲第1番〉。ブームスのオーケストラ作品群への旅を始める、最初の回にはぜひ体感したい、壮大なシンフォニーです。

◆春の詩情も美しく——ディーリアスの名品も！

ちなみに、今年はブームスの生誕190周年にあたります。記念の年ですから、ブームス・シリーズにもふさわしくあるわけですが、新シーズンの定期では季節にふさわしい名品の数々も併せてお聴きいただきますので、こちらも楽しみにしていただきたいところ。

次回定期では、英国の作曲家フレデリック・ディーリアス（1862～1934）の《春の牧歌》をお聴きいただきます。まさに春、その彩りと喜びとが輝く音に溢れきらめくような、本当に詩情美しい音楽です。

ディーリアスはイギリス生まれですが、若い頃にアメリカ、北欧やドイツと遍歴を重ねたのち、フランスはパリ郊外の自然あふれる地で暮らしたひと。〈イギリス音楽〉と限定される種類の音楽でもないように思えますが、彼の音楽に独特の、自然を深く慈むような詩情豊かな歌と響き——その優しさと色彩とは、ドイツでもフランスでも北欧でもない……聴くひとそれぞれの〈懐かしいところ〉の音楽、なのかも知れません。

ちなみにこの《春の牧歌》（27歳の1889年に作曲）は、なぜかディーリアスの生前には埋もれていました。蘇演されたのは、没後長らく経った1995年（1）になってから。100年以上も未知の存在だったのが本当にもったいない！と思えるほど、美しく魅力的な曲ですから、ぜひお楽しみに。では、次回もこのホールでお会いいたしましょう！

やまの たけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。

Profile

